

燃料に未利用材を本格利用する、「グリーン発電大分」の木質バイオマス発電所建設予定地
 =大分県日田市天瀬町



未利用材を本格利用

日田バイオ発電に期待

大分県日田市天瀬町で近く、未利用の木材を主な燃料とする木質バイオマス発電所の建設が始まる。未利用材を本格利用する発電所は九州では初めてで、全国でも珍しい。地元では山に放置されてきた間伐材を受け入れ林業活性化につながると期待が高まる一方、燃料用と競合する合板向けなどの木材が値上がりするとの懸念も漏れ始めた。木質バイオマス発電所の影響に関心が高まっている。

発電所を建設するのは、い取り制度が始まった約1万戸分の電気を供給する。燃料として大分、グリーン発電大分(森山政美社長)。林業の衰退を食い止めようと、未利用材を発電に生かす方策を検討していたところ、日本大震災と東京電力福島第一原発の事故が発生。昨年7月に再生可能エネルギーの固定価格買取は約5千円で、一般家庭葉など、燃料の安定調達

約1万戸分の電気を供給が発電事業の鍵を握る。燃料として大分、福岡両県などから年間約7万ト(約10立方方)の未利用材を調達する。確保するめどが立ったという。日田郡森林組合の搬出費用が賄えず放置された間伐材や、買い手が「原木の販路が広がり、林業従事者の所得が上がれば、山の手入れも進む

「林業活性化を後押し」

合板向けなど 値上がり懸念も

「木材の相場全体が上がらないかが心配。発電所が増えれば、木材の取り合いになるかもしれない」と懸念を示す。森山社長は「相場に影響が出るかもしれないが、山林を守るには木材価格を上げる仕組みが欠かせない。発電所を安定稼働させ、林業の復活につなげたい」と意気込む。(川崎弘)

一方、地元製材業者の中には心配する声もある。現在協議中の発電所の未利用材買い取り価格が、従来の相場より高い可能性があるためだ。市内の製材所社長の一人は「木材の相場全体が上がらないかが心配。発電所が増えれば、木材の取り合いになるかもしれない」と懸念を示す。